

初編は、序章として進みます。序章では、福沢諭吉が学問の重要性について、人間の本性や学びの目的に触れます。彼は、学問成長自己の啓蒙を図り、人間としての成長を解決することが重要だと主張しています。

福沢諭吉が学問の重要性や自己啓発、実学の重視、視野の広さと国際性について説いています。学問を通じて知識と教養を身につけ、自らの意欲と努力によって学び続ける姿勢を持つことの重要性を強調しています。

また、実学とは理論と実践を結びつけた実用的な知識であり、国際的な視野を持つことで自己の成長と国家の発展に貢献できると述べています。

福沢諭吉は日本が諦めている課題と問題点について議論します。そのため、日本が他国と肩を並べるためには、新しい知識と学問の取り入れが必要だと認識しています。

さらに、福沢は教育の重要性を強調します。知識を身に付けることが、個人の成長国家の発展のためであると考えています。彼は知識の習得が個人の運命を決めると考えています。教育を受けることで社会の上位に発展し、より豊かな生活ができると説いています。福沢はまた、学問を学ぶ日本人がより高度な賢明な価値を持つことができるとも主張しています。学問によって広く知識を得ることで、人々は自己啓発をし、善な市民として社会に貢献できると信じています。

総じて、福沢諭吉は『学問のすすめ』初編において、日本の現状とその改善政策としての学問・知識の重要性を強調し、個人と国家の発展を注目するために重要なものとしています。西洋の学問を吸収し、新たな知識を取り入れることで、日本は他国と肩を並べ、より進んだ国家となることができると説いています。